

マレーシアの英語教育の実際と国際理解教育の実践について

前コタキナバル日本人学校 教諭

茨城県守谷市立御所ヶ丘中学校 教諭 野口 美紀子

キーワード：国際理解教育、現地校交流活動、実践的コミュニケーション、異文化理解、外国語（英語）教育

1. はじめに

マレーシアは東南アジアの連邦制の君主国で、イギリス連邦に属する。国土は、マレー半島南部とボルネオ島のサバ州及びサラワク州からなる。高温多湿の熱帯気候で、四季の区別はほとんどない。コタキナバルは、ボルネオ島北端部にあるサバ州の州都で、人口約21万人の南シナ海に臨む海陸交通の要所である。森林、鉱物資源が豊富にあり、ゴム、木材、魚介類などを輸出している。

2. マレーシアにおける言語の多様性について

マレーシアは、マレー系（65%）、中国系（24%）、インド系（8%）の3大民族から成る多民族国家であり、それぞれの母国語も使用されている多言語国家でもある。マレーシアの公用語はマレーシア語であるが、多くの人が英語や中国語など複数の言語を習得し話すことができる。様々な民族が同時に生活しているので、普段の会話や公的な手紙などのコミュニケーションのやり取りにはマレーシア語に加え、英語が共通語として使われている。多言語、多民族、多宗教など、まったく別の属性を持った民族同士が1つの国で生活していく上で、国民統合の手段として「国語（マレーシア語）教育」は必須であるとされている。一方で、「母国語での教育」の選択は各民族のアイデンティティを尊重する個人に与えられた権利であり、また「英語教育」はグローバル社会で国家としての競争力を維持、向上するために必要不可欠である。このように「国語（マレーシア語）教育」「母国語教育」「英語教育」の言語教育は、国家統一のためにそれぞれ重要な役割を示しており、マレーシアにおいてこの3つの言語教育は必須であると言える。

3. マレーシアの教育制度について

マレーシアでは、2020年までに先進国の仲間入りを果たす、という大きな国家目標を掲げて躍動中である。その国家成長の鍵となるのが、先に述べた多民族、多言語社会特有の言語教育である。マレーシアでは、少数民族の母国語も各民族別の学校にて就学前教育、初等教育にて教育される。教育省は、国民の国語力・英語力の育成に向け、現地校では公私立に関係なく、どの学校でも小学校から母国語（公用語）であるマレーシア語と準公用語である英語の習得を目指している。そのため、英語以外に数学（算数）・理科においても英語で教えるという方針をとっている。また、国語の授業で3言語（英語、マレーシア語、中国語）を習得するカリキュラムが組まれており、多言語に対応した教育課程となっている。

また、マレーシアの教育制度はかつてイギリスの植民地であったことから、イギリスとよく似ている。小学校は1年から6年まで。6歳より入学し、日本と同じ義務教育である。その後、中学校は3年間（Form 1～3）、高等学校は2年間（Form 4～5）、大学進学課程が2年間（Lower 6とUpper 6）、大学が3年～6年間となっている。マレーシア教育省は各学部修了時に全国統一テスト（小学校修了時は「Ujian Pencapaian Sekolah Rendah:UPSR」、中等学校Form 3で「Penilaian Menengah Rendah:PMR」、高等学校Form 5で「SPM」、その後の高等教育過程学年のLower 6にて「Sijil Tinggi Persekolahan Malaysia:STPM」、Upper 6にて「STTPM」、「International Baccalaureate:IB（国際バカロレア）」等を実施しており、その結果により各レベルの学校進学が決定する。「UPSR」の成績が悪い場合は、中学校1年生の予備学年（Peralihan/Remove Class）を履修してからでなければForm 1に進級できない。また、Form 5修了時の「SPM」試験の成績優秀者は、新聞の全国版に大々的に発表され、その後の進路にも大きく影響

する。

基本的にForm5で修学年限は終わりになるが、成績優秀者には国の奨学金によって進学することもできる。また、マレー人は「ブミプトラ政策（マレー人優遇制度）」により優先的に進学できるなどの措置があるが、この制度がマレーシアの教育問題に大きな影響を与え、経済の大きな足かせになっていることも事実である。

4. 現地校の教育システムについて

コタキナバル日本人学校は、創立35年目を迎え、児童生徒数16名（平成29年6月1日現在）、教職員10名（現地職員含む）の小規模校である。複式学年での授業、英会話やマレーシア語の学習、現地校との交流などを行いながら、豊かな人間性と国際感覚をつけた心身ともに健全な児童生徒の育成を目指した教育活動に取り組んでいる。

マレーシアにはローカル校のみならず、インターナショナル校も多く存在する。本校では、国際理解教育の一環として、毎年現地校2校（ローカル校・インターナショナル校）との交流活動を行っている。交流校は、Kinabalu International School（キナバル・インターナショナル・スクール；以下KISと略す）というイギリス系私立学校と、SRS Datuk Simon Fung（ダトゥ・サイモン・フン・スクール；以下DSFSと略す）という中華系の私立学校であり、両校の教育システムの概要については以下の通りである。（表1）

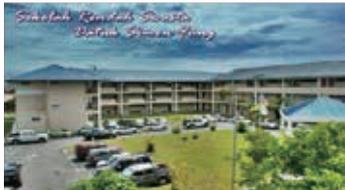
| Kinabalu International School (KIS) | 学校名 | SRS Datuk Simon Fung (DSFS) |
|--|-------|--|
|  | |  |
| 1973年 | 創立 | 1988年 |
| イギリス系私立学校 | 学校 | 中華系私立学校 |
| 英国式教育カリキュラム | 教育課程 | マレーシアの教育カリキュラム |
| 3歳～17歳 | 学齢 | 3歳～17歳 |
| <ul style="list-style-type: none"> ・ Foundation stage (幼稚部：3～5歳) ・ Key stage：Year1～11 (小学部・中学部：6～15歳) ・ Sixth Form：Year12～13 (高等部：16～17歳) | 学部編成 | <ul style="list-style-type: none"> ・ Taska/Tadika Datuk Simon Fung (幼稚部：3～5歳) ・ SRS Datuk Simon Fung (小学部：6～12歳) ・ Maktab Nasional (中学部：13～17歳) |
| 400人以上 | 児童生徒数 | 450人以上 |
| 44人 | 教員数 | 45人 |
| 3学期制（9月～7月） | 学期 | 2学期制（1月～11月） |
| 英語を主要言語とし、外国語の授業でマレーシア語、中国語、フランス語等を学ぶことができる。 | 言語教育 | マレーシア語を主要言語とし、英語で数学（算数）、理科の授業を行っている。 |
| IB（国際バカロレア）のディプロマプログラムを適用。Year13時に本試験を実施。 | 教育制度 | 小学部修了時に全国統一テスト「UPSR」を実施。成績によって中学部への進学が決定する。 |
| 各国の様々な大学へ進学。IB（国際バカロレア）資格適用。 | 進学状況 | 成績優秀者は国内の国立大学等へ進学（奨学金制度有）。他は就職。 |

表1 「KIS・DSFSの教育システムの概要」

両校の教育システムはそれぞれ異なっているが、共通している点は言語教育（特に英語教育）に力を入れているということだ。上記「3.マレーシアの教育制度について」でも述べた通り、マレーシアでは今後の国際化に向けた様々な言語教育システムを取り入れている。DSFSでは、英語、数学（算数）、理科の授業を、KISはほとんどの授業を英語で実施しており、児童生徒はほぼ理解できているようだ。しかし、環境によって英語が苦手な児童もいるため、DSFSではラーニングセンターを校内に設け、Special needs teacherとよばれる教師たちがそれらの児童のケアにあたっている。KISでは、ESL（英語特別支援）プログラムやSpecial Learning Classを設けるなど、英語教育に対する支援をしっかりと行っていた。両校とも国際語としての英語の重要性を十分認識した取り組みをしており、これからの日本の英語教育においてもとても参考になると感じた。

5. 現地校との交流活動について

(1) 現地校との交流活動について

本校は、KISとDSFSとの交流活動を、訪問（1回）と招待（1回）という形式で隔年実施している。教育カリキュラムの異なる両校との交流は、英語やマレーシア語などの外国語を使って実践的なコミュニケーションを図ることができる貴重な場である。

この3年間で行った訪問、招待共に交流活動のねらいを以下の3点とし、各活動を行った。

1. 他校の児童生徒と交流することによって、より広い人間関係をもつきっかけとする。
2. 日頃の英語学習の発表の機会とする。
3. 日本の文化を紹介する活動を通して、自分の意見や考えを伝えようとする態度を養う。

(2) 交流活動①【DSFSへの訪問】

本校児童生徒がDSFSへ訪問し、授業参観や交流活動等を行った。本校の児童生徒を低・中・高学年の3グループに分け、各学年の授業を参観したり、参加したりした。国語では、マレーシア語の授業、外国語として英語、中国語などの授業があった。DSFSでは、授業で使用する言語は主にマレーシア語であった。交流活動では、6年生の全クラスが参加し、様々なレクリエーション活動を行った。DSFSの児童や先生がゲームのやり方やルールを英語で説明し、それに従って活動した。本校の児童生徒は英語の能力に大きな差があり、その説明だけでは活動できない児童もいたが、DSFSの児童とペアを作り、お互いに協力して活動することで、理解できたようだ。最後に日本の歌と踊りを披露した。いずれも学習発表会で行ったもので、長い期間練習を重ねたものである。日本の文化を感じさせるこの発表を見て、DSFSの児童生徒も大変喜んでいて、本校生徒代表のお礼のスピーチを英語で行い、感謝の気持ちをしっかりと伝えることができた。



伝統文化紹介「習字・七夕飾り」

(3) 交流活動②【KISを本校へ招待】

KISの児童生徒を本校へ招待し、交流活動の内容を1部「日本の伝統文化紹介」、2部「日本の遊び」、3部「レクリエーション」、4部「文化交流」の4部構成にして行った。まず、1部「日本の伝統文化紹介」では、習字（高学年）と七夕飾り（低学年）を行った。習字では、漢字6字「桜、海、和、空、虹、愛」を提示し、各文字の意味について英語で説明した。その後、ペアで筆の使い方や文字の書き方を英語で教えた。七夕飾りでは、七夕の由来を英語で説明し、一緒に七夕飾りを作った。札に願い事も書き、笹竹に飾った。2部「日本の遊び」では、本校児童生徒を3つのグループに分け、けん玉、駒回し、輪投げ、折り

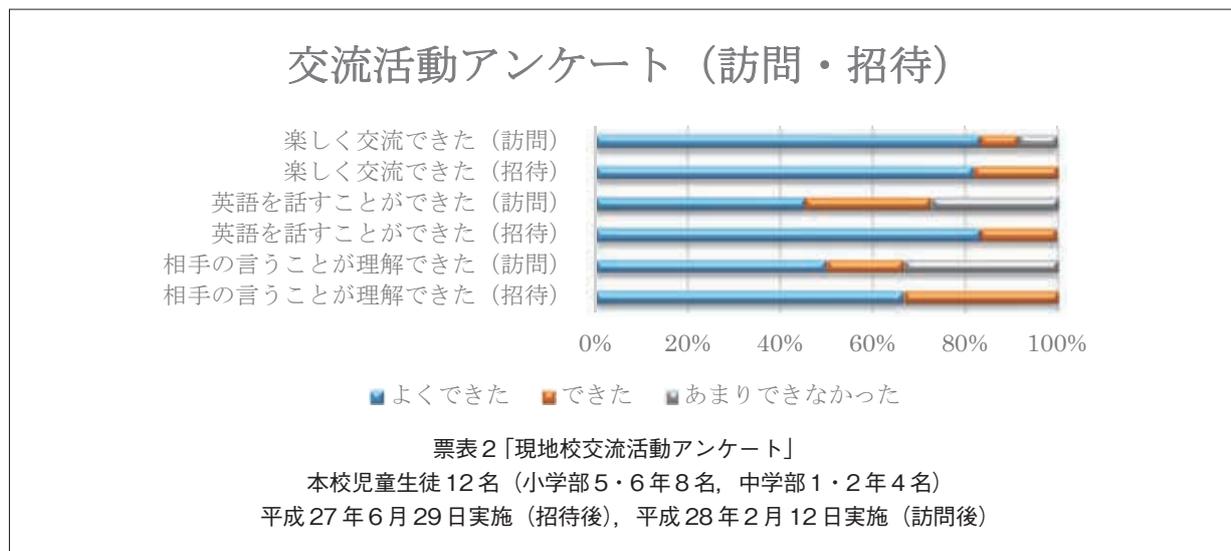
紙「相撲」「兜」、福笑い、豆移し、お手玉分担して行った。

3部「レクリエーション」では、「紅白玉入れ」「ドッジボール」「サッカー」を行った。両校をそれぞれ2チーム（紅白）に分けて、玉入れを行った。やり方を英語で説明し、デモンストレーションした後一緒に活動を行った。両校をそれぞれ2チームに分けて、ドッジボールとサッカーを行った。お互いに協力しながら楽しく活動することができた。

4部「文化交流」では踊りの披露があった。KIS 児童生徒が、マレーシアの伝統的な踊り「バンブーダンス」を披露し、踊り方を英語で説明して教えてくれた。その後、両校の児童生徒がリズムに合わせて一緒に踊った。交流活動（招待）の計画、準備においては、本校生徒が行った。中学部を中心に、英会話の授業や総合的な学習の時間などを使って準備を進めた。活動の全てを英語で行わなければならないため、どのように説明すれば理解してもらえるかと試行錯誤しながら各自工夫を凝らし、様々なアイデアを出し合って準備を行った。「けん玉」では、生徒が作成したパワーポイントを提示しながらデモンストレーションし、やり方の説明を行った。「兜」では、生徒が作成した折り方の図表を各ペアに用意し、説明の補助とした。いずれも、生徒が自ら考え工夫を凝らして準備したものである。このような主体的な行動ができたのも、外国語（英語）を媒体とした交流活動であったからである。

6. おわりに

平成26年度から平成28年度の3年間、交流活動（訪問・招待）後に本校の児童生徒にアンケートを実施して意識調査を行った。今回の分析には、転出入による人数の変動が最も少なかった平成27・28年度のデータをもとに考察を行った。（表2）



アンケート結果より、訪問後と招待後のどちらも「交流活動が楽しかった」という回答が8割を超え、充実した活動であったことが分かる。しかし、「英語を話すことができた」と感じた児童生徒は「よくできた」（訪問後42%、招待後83%）と「できなかった」（訪問後33%、招待後0%）との回答に差が出た。どちらも招待後の数値が良かったが、「英語で説明することができた」「英語でやり方を伝えた」など、自分たちが主体となって活動したことがその理由である。逆に、訪問時は自分が説明を聞く側（受け身）の立場であったために、あまり話ができなかったと感じた児童生徒が多かったようだ。さらに、「相手の言うことが理解できた」との回答も、「よくできた」（訪問後50%、招待後67%）、「できた」（訪問後17%、招待後33%）、「できなかった」（訪問後33%、招待後0%）と招待後の数値の方が良かった。「質問されたことに答えられた」「相手が聞いてきたことが理解できた」など、自分の発信している英語に対する質問等に答えられた、という満足感があつたようだ。以上の結果から、自分から英語を話そうとする積極的な姿勢や立場（状況）が、聞く立場（受け身）でいる時よりも、英語を「話

す・聞く」意欲や態度の向上につながる事が分かった。これは、同校との訪問・招待の実践を通して学んだことである。

現地校2校との交流活動では、両国の文化を伝え合う手段として外国語（英語）を用いた。子どもたちの大半は、英語を使って自分の思いが伝えられた喜びや満足感を味わうことができ、もっと英語で話ができるようになりたいという意欲の向上につながったようだ。学習した英語を駆使して実際にコミュニケーションを図るという体験の積み重ねが、英語習得への意欲や自信につながっていくのだと思う。日本でも国際化時代を迎えて小学校から英語教育を進めているが、「実際に使える英語」を習得させるためには、効果的なカリキュラム（ソフト面）と英語力の向上・定着を図る教育システム（ハード面）の開発以上に、英語を使う実践の場の設定が必要不可欠なのであると感じる。

今回マレーシアの英語教育の実際に触れ、言語の習得段階でどれだけ多く英語に触れさせるか（英語による教科指導）、また学んだ英語を使う場が身近に多くあることや就学後、社会で英語が活かされる場があるということが、より英語の習得意欲や修得度を高めることにつながることを、改めて考えさせられた。今後、日本においても実践的な英語教育がますます求められるであろう。教育現場においては、外国語（英語）を使ったコミュニケーションの体験をどれだけ積み重ねることができるかが重要になってくると思う。自分の言った英語が「通じた」、相手の英語が「分かった」という喜びや達成感を少しでも多く児童生徒に感じさせられるような教育活動を今後目指していきたい。

